

PROFILE

南 沢 享

東京慈恵会医科大学細胞生理学講座・教授



2012年(平成24年)5月に早稲田大学生命医科学科から東京慈恵会医科大学細胞生理学講座に異動しました。本講座は杉本良一先生、酒井敏夫先生、栗原敏先生(現日本生理学会理事長)と引き継がれてきた教室です。本学に赴任し、「伝統」について改めて考える機会を得ました。

私は小児循環器医としてキャリアをスタートさせた直後から横浜市立大学小児科の新村一郎先生に心電図の読み方と臨床電気生理学をたたき込まれました。新村先生は東京女子医科大学日本心臓血圧研究所(心研)循環器小児科の初代教授である高尾篤良先生の門下生です。当時、心研小児科は全国の小児循環器医が高尾先生を慕って研鑽に集う梁山泊でした。門下生は同門ならず「異門会」の名の下、全国各地で活躍しています。私も留学を挟んで2年半、心研小児科にお世話になりました。最初の「伝統」との出会いになります。

次に高尾先生、新村先生の弟子にあたる柴田利満先生のご紹介で鶴見大学歯学部生理学の三枝木泰丈先生から筋生理学を学ぶ機会を得ました。柴田先生、三枝木泰丈先生ともに米国ジョーンズ・ホプキンス大学生理学教授であった佐川喜一先生の門下生でした。佐川喜一先生は私が勤務した横浜市立大学第一生理学教室のご出身です。佐川先生門下生には前国立循環器病センター研究所所長の菅弘之先生をはじめ、循環生理の分野で活躍されている先生が実に多くいらっしゃいます。第2の「伝統」との出会いでした。

そして現在、名取禮二先生をはじめとして筋生理学に輝かしい伝統を刻む東京慈恵会医科大学で、第3の「伝統」に身を置いています。赴任後、

本学出身の入澤宏先生の著書「先生と私」に出会いました。その中にある一節を紹介いたします。「歴史的にみても、よい研究が育った陰には必ずよい先達がいる、学問の萌芽を確実に育てていることが多いためである。すなわち、よい伝統のない所から学問が育つ可能性は非常に少ないことも事実ではなかろうか。」

先達と弟子・後輩との織り成すダイナミクスそのものが、綿々と息づく「伝統」の本質に思えます。孫弟子ではありますが、いくつか異なる「伝統」を受け継いでいる自分の幸せを慶ぶとともに、「伝統」の上にあぐらをかいて慢心するわけにはいきません。私は初心を想い出し、これから先の研究生活において、愚直に心血管系が形と機能を生む機序の解明に少しでも近づけるよう努力したいと思います。生理学会員の皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴

- 1984年3月 弘前大学医学部卒業
- 1993年4月 鶴見大学歯学部生理学教室助手
- 1996年1月 カリフォルニア大学サンディエゴ校
ポストドクトラルフェロー
- 2000年6月 東京女子医大心臓血圧研究所循環器
小児科・特任助手
- 2002年1月 横浜市立大学生理学第1講座・講師
- 2004年1月 横浜市立大学生理学第1講座・助教授
- 2007年4月 早稲田大学先進理工学部生命医科学
科・教授
- 2012年5月 現職